会報
41号

れきふーう

函館の歴史的風土を守る会会報
No.41　H 4．6．20
発行所　函館の歴史的風土を守る会
事務局　函館市五稜郭町４３－９
五稜郭タワー株式会社内
電話（0138）51－4785
印刷所　双葉印刷　電話 53－7730番

谷地頭小学校の旧校舎

越野　武

函館とは、ずいぶん長いおつきあいをさせていただいています。建築史が表看板の小生ですので、歴史の豊かな函館は、普段「メシのタネ」にしているようなところもあって、できることであればご恩の一部でもお返ししなければならない立場にあります。で、このたびは谷地頭小学校の校舎が壊されるかもしれないと聞き、生意気にも市長さんへお手紙をさしあげたりしたわけです。小生の気持ちとは裏腹に、ご迷惑をおかけしているのでなければよいのですが。

函館とは長いつきあい、と書きましたが、良いことばかりしてきたわけではないようです。谷地頭小学校問題の発端のひとつがそうでした。日本建築学会編の『日本近代建築総覧』(1980)は「日本の近代建築で現存する主要なもの……約13,000件」のリストです。谷地頭小学校は、不幸なことにこのリストから洩れており、そのことが「文化財的価値がない」理由のひとつとされた、というのです。小生は『総覧』の北海道地区の責任担当者でしたから、なにはともあれ最初にお詫びしなければなりません。

札幌建築鑑賞会会員・建築学会計画委シンポジウムの出席者が旧谷地頭小学校を見学

この『総覧』リストづくりには、ずいぶん長い時間がかかっています。共同作業の出発は1960年、本格的な直接の調査は70年代の後半のことでした。この頃の小生どもの頭のなかには、明治初期のものは別格として、それより時代の下がる小学校校舎はあまり入っていませんでした。谷地頭小学校ばかりでなく、明治後期、大正、昭和の優れた校舎がいくつも見落とされていたのではないか、と思います。当時はまだ多くの木造校舎が残っており、しかし、実際には急速に消滅しつつある状況に、十分な危機感を持っていなかったのです。はっと気がついたときには、身のまわりから古い木造校舎が消えていた、というのが、３年前に札幌周辺で木造校舎を調べてみた結果でした。

『総覧』調査のころから15～20年が過ぎ、歴史的建築の評価もすっかり変わりました。国の重要文化財だけでも、大正時代の建築がいくつか指定されましたし、農場や工場のような産業施設も仲間入りしました。歴史的町並みが文化財保護法によって保護されるようになったのもこの間のことです。文化財の価値をはかる物差しが、単純な、美術的なものばかりでなく、私たち庶民の生活史を刻んだようなものも含む、複眼的なものになってきたのです。基準自体が流動的というか、ずいぶんと変わりつつあったのですから、谷地頭小学校校舎については、もう一度検討しなおす必要が十分すぎるほどある、と思うわけです。

小生の個人的な考えでは、道内に遺存する小学校校舎の現況からみて、谷地頭小学校は道の指定文化財にふさわしいのではないか、と思っています。ただ、今すぐに市や道の文化財に指定されるかどうかにはあまりこだわっていません。小生が一番強調したいのは、残さなければならないのは、指定文化財だけではない、ということです。これは当たり前すぎるほど当たり前のことです。指定文化財でないから壊してよい、というのは無茶です。函館には優れた歴史的建築がすごくたくさんあります。そういう建築を全部市の文化財にしなければ残せない、なんてことになったらもう絶望です。現にあるものはとことん大切に使いこなしていく、そのために必要なお金はちゃんと注ぎこむ、という実に単純なことが守られなければ、歴史的建築や町並みを残していくなんてできっこないのではないでしょうか。

これは、しかし易しいことではない。一種の文化運動です。馬鹿にされがちですが、強制力のない精神運動みたいなものです。歴風会のような優れた市民運動を通じてしかできないことです。だからこそ行政の側は、重大な責任を負っている、といってよいのではないでしょうか。谷地頭小学校校舎のような、古くて優れた建築を、率先して壊してしまうのでは、こんなか弱い文化運動はひとたまりもないからです。よろしくお願いします。

（北海道大学教授・建築史）

〝バブルのあと〟

岡　田　悌　輔

昭和49年のことであった。突然、青函局の職員の訪問を受け、青函連絡船廃止に伴い寮として使用していた現在の古稀庵の建物が不要になるので、買って欲しいとの要請があった。土地の所有者が行方不明であり、私の親戚であったための話でもあった。

八方手を尽くして漸々買取った建物ではあったが内部は荒れ放題、どうしたら住める建物になるのか悩むほどであった。それにひきかえ、向かい側にある旧茶屋邸がすごく立派であった。個人住宅として使用するには広すぎたためペンションとして利用することにした。まず建物全体を洗うことからはじめ、妻は生まれたばかりの娘を背負い、何度も何度も床掃除をし、土台もとりかえた。不燃材・難燃材の使用をすすめる消防署と折り合いをつけながら、改装を終え昭和50年に、夏も冬も涼しい、さしたる設備のない女性専用ペンションとして不安だらけの開業にふみきった。

当時の観光客の多くは、大きなリュックを背負い、早朝から函館の隅から隅まで見物して行ったものでした。津軽海峡を渡って北海道旅行などそう簡単にできない時代でもあった。その頃函館は、連絡船の廃止、函館ドックの衰退、北洋漁業の先細りなど、暗いニュースが多く、何をすれば自立できる街になれるのか、摸索の時代であった。道路は未舗装、町筋も雑然とはしていたが、キラリと光る町並みに気が付きました。この町並みを磨けば観光都市としての自立も案外可能かも知れないとの希望がわいてきました。若者達は都会に行ったら帰って来ない。たとえ帰って来ても夢を持てない様な所ならなお更である。町並みが整備されたなら、若者達も帰ってこれる場が出来る筈だと思った。折りからのレトロブームの風潮や経済の発展に伴い、観光客も年々増加の一途を辿り、昨年度は500万人を越えるほどになった。しかしながら、高度成長時代に取り残されたこの西部地区の町並みは全国的な高い評価を得た反面、様々な問題をもたらした。

古稀庵開業当初、私は函館が事ある毎にマスコミに取りあげられることに喜びを感じ、観光客には―すばらしい町を充分見て帰って下さい、かえられたら回りの人達に宣伝して下さい―と頼んだりし、まるで子供を育てるように慈しんできたこの町並みがいつの間にか東京資本の餌食となってしまった。先づ、文化服装学院の解体に始まる、マンション問題、伝建地区の伝建物の解体、後手後手に回る対応のまずさとこれに苦慮する行政の姿勢に夢が急速にしぼんでいった。

相も変わらず利潤追求のみにはしる企業、解体そして開発が地域経済の発展、活性化につながるとの幻想、保存はイコール保守的レトロ趣味という誤解、今日もこのような図式が相も変わらず大手をふってまかり通っているのではあるまいか。

あやまれる開発志向のパターンを払拭するには、市民・行政・開発業者・建物所有者、そしてマスコミ等によるコンセンサスを得たキチンとした理念と具体的な青写真を一体として作りあげるのが急務と思う。確かに景観条例制定、国際観光都市宣言、伝統的建造物指定など、一見派手なアドバルーンはあげたが、方法論を持たない原則論に終始しているのではないだろうか。方法論を持たないビジョンの羅列なら画餅に等しい。先般、旧茶屋邸跡での地鎮祭があり、出席し大変驚いたことがあった。

同日出席していた市の某課長が挨拶の中で「良いものを造って頂けるそうでありがとう御座います」との言葉があった。地鎮祭のつい数日前迄、課は違うが同じ市役所の職員達が、徹夜で張り込みをし、抜きうち解体を阻止するため頑張っていたのに……。

このような理念のなさ、市役所での意志の不統一に函館の町並みに明日はないと断言して憚らない。

せめて“これだけの市民の注目をあびた建物の跡地だけに後世に残るものを作って下さい”位のことが何故言えないのか。市民運動の方にもこのような市側の理念のなさにもっと目を向けてはどうかと思う。今騒がれている旧谷地頭小学校校舎解体問題にしてもこれは行政の理念のなさこそが問題と思う。又、旧茶屋邸問題になるが、市民運動に参加している人で、一体何人が営業中の茶屋邸に側面からの応援をしただろうか、むしろ解体問題が起きてから存在を知った人が多いのではないだろうか。口で反対するのは簡単である。しかし市民運動の原点は側面から支える温かな姿勢があってこそではないだろうか……。

今後みんなで町並み最前線で保存に苦慮している人々の力になろうではないか。　（古稀庵あん主）

“チンチン電車を走らせよう会”からのご報告

小　橋　達　也

☆元函館水電39形電車の復元決定

チンチン電車を走らせよう会が運動を進めてまいりました、『雪２号』の客車への復元が、平成４・５年度の事業として函館市予算に盛り込まれ、これにより来年秋に登場することが確定致しました。

『雪２号』は、明治43年東京天野工場（現在の日本車輌東京支店）で製造され成田市内を走っていた成宗電気軌道で活躍し、大正７年に現在の函館市交通局と北海道電力㈱の前身である函館水力電気株式会社に仲間15両の内の５両が譲渡され、36～40号電車としてお客さんを乗せて昭和11年迄函館市内を走りました。

その翌年の昭和12年に運転席の一部を切り落とし、除雪用ササラ電車に改造されました。以来56年間もの永い期間、函館市民の足である市電のダイヤを守るため活躍し、今年３月その使命を終えました。

現在はこの『雪２号』を改造するにあたっての準備を函館市交通局で行っております。

チンチン電車を走らせよう会では、この39形電車の完成後も永久に動態保存するための運動を進めて行く考えでおりますので、どうか当会に対するご支援を今後も宜しくお願い申し上げます。

☆メセナによる会の運営

チンチン電車を走らせよう会が、昭和63年に発売した“ラン・アゲインチンチン電車記念乗車券”のイラスト（渡辺譲治氏制作）を使用した商品が６月末現在３種類発売されております。

函館酪農公社㈱より発売中の低温殺菌牛乳“箱館牛乳”のパッケージとして、そして元町日和館から発売されている小物入れトレーと、テレホンカードの３商品です。

これらの商品に付きましては、デザイン使用料として現在までに合計34万円のご寄付をいただいております。

今後もデザイン並びにチンチン電車を走らせよう会のトレードマークを使った新商品を増やし、39形電車の運行費用に充当したいと考えております。

お問合せは下記までお願い致します。

☆会報『チンチン電車』発行について

今年１月までに６回発行致しました当会の会報を次号より、幻洋社出版“ＨＡＫＯＤＡＴＥ”のなかで特集ページとして掲載することに致しました。

この本は函館の歴史・文化を様々な角度から紹介している、函館市民にとっては大変興味深い内容になっております。

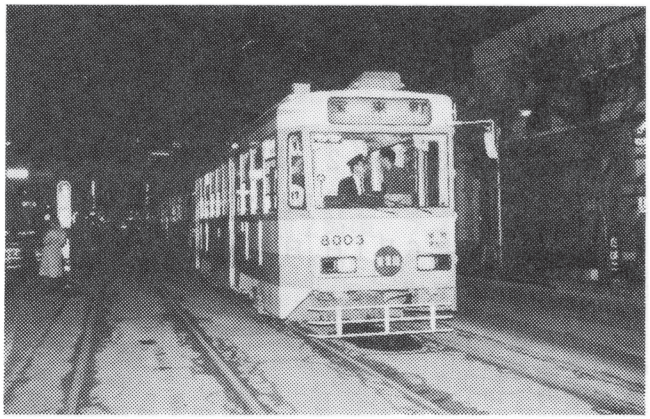
５月発行の９号では函館の市電を特集し、チンチン電車を走らせよう会の活動も詳しくご紹介していただいております。

定価は350円で、市内有名書店にて是非お買い求め下さい。

次回号（10号）は、チンチン電車を走らせよう会の正会員の皆様には会報としてご送付しますのでお楽しみに。

☆東雲線さようなら記念セット販売

平成４年３月31日限りで、約79年間の歴史にピリオドを打った市電東雲線（松風町～栄町～宝来町）当会では最終日２両の電車を借り切って『東雲線お別れツアー』を盛大に行いました。



東雲線を最後に通過した電車、チンチン電車を走らせよう会の貸切電車最新鋭　8003号

チンチン電車を走らせよう会では、東雲線さようなら記念セット（テレホンカード・終電証明書１組1500円、送料 175円）を発売中です。現金書留か定額小為替で必ず郵送で下記までお申し込み下さい。

チンチン電車を走らせよう会へのお問合せは必ず往復はがきでお願い致します。下記住所には当会の事務局員は常駐しておりませんので、電話によるお問合せは固くお断り致します。

〒 042　北海道函館市駒場町15番１号　函館市交通局協力会内　『チンチン電車を走らせよう会』

ＦＡＸによるお問合せ　(0138)-57-8533　　この場合必ず返信先ＦＡＸ番号を明記下さい。

（チンチン電車を走らせよう会事務局長）

ペリー日本遠征と箱館開港

村　井　雄二郎

「開港への序曲」と題し、４月27日付け北海道新聞夕刊から７回の連載後、５月23日の「歴風会」総会での講演依頼があり、それらをまとめて少々書いてみたい。

嘉永６年(1853)６月３日、浦賀沖に黒船４隻が出現、ペリー艦隊の来航であった。幕府のあわてぶりをからかった句に「泰平の眠りを覚ます上喜撰、たった四はいで夜もねむれず」とあった。喜撰とは当時のお茶のブランド名で、「よいお茶」と「蒸気船」をかけているのである。役人のあわてぶりをよそに庶民たちは見物の小船まで出す騒ぎであった。

巨大な黒船に特に恐怖を感じていないのはおもしろい。「日米和親条約・神奈川条約」の締結は翌年の嘉永７年３月３日で、下田、箱館が開港となった。２世紀以上続いた鎖国制度が徳川幕府の封建支配を盤石のものにしていたわけだが、この開港によってその土台が大きく揺らぎ急速に幕末を迎えることになる。この歴史的な箱館の開港の時期が、明治になって３説に分れている。

１．嘉永７年３月説、２．安政２年３月説、３．安政６年７月説である。それぞれに理由があるので始末が悪い。安政６年６月１日、日米修好通商条約により、箱館、神奈川、長崎を開港とある。箱館は５年前に和親条約で開港しているが、こんどは貿易も自由に許可するという条約であった。

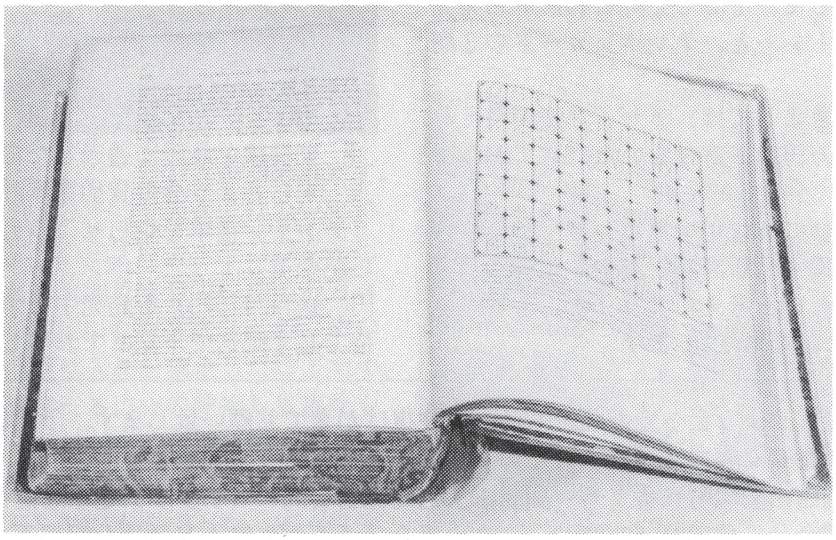
昭和10年、前年の函館大火で全市民が意気消沈していた時、安政６年7月1日（新暦）の開港とすれば77年目で「喜の字の祝い」となり、これを「開港記念日」として、「港祭り」を盛大にしたらどうかという案が出され、市議会の議決によって毎年７月１日を開港記念日と制定、この日を休日と定めた。

「函館大火」とは、昭和９年３月21日、暴風雪が吹きすさぶさなかの大火で、東京以北最大の都会であった函館の４割りを焼失、死者行方不明、2,827名の世界的大惨事だった。

昭和10年７月の初めの「港祭り」は盛大なものだったが、しかしこの時、市民は函館が世界にむけて開港された日本最古の港だったとの誇りを捨ててしまったのであった。蛇足であるが下田は安政６年の神奈川開港により閉鎖、長崎は鎖国の時代から、オランダ、韓国、中国向けの開港だった。

安政２年説の場合、和親条約には下田は嘉永７年３月、即時開港、箱館は一年後の３月に開港と定めたので、この説があるが、実は嘉永７年８月に長崎で日英和親条約締結の際に、箱館は英国船が長崎を出港後50日をもって開港と定めたので、同年10月に開港となり、安政２年説は根拠がなくなっているのである。

結局、嘉永７年３月が正式な函「箱」館開港であることが理解できよう。しかし明治になって嘉永７年３月の箱館開港は「狭義」の開港とする誤った解釈が幅をきかし始めた。明治44年刊行の「函館区史」は「狭義の開港というべきものなり」と書いた。当時この問題についてずいぶん論争があったようだが、条約上の「開港」を、あまり貿易に関係がないから開港でないとするのは変で、下田の開港も否定することになる。

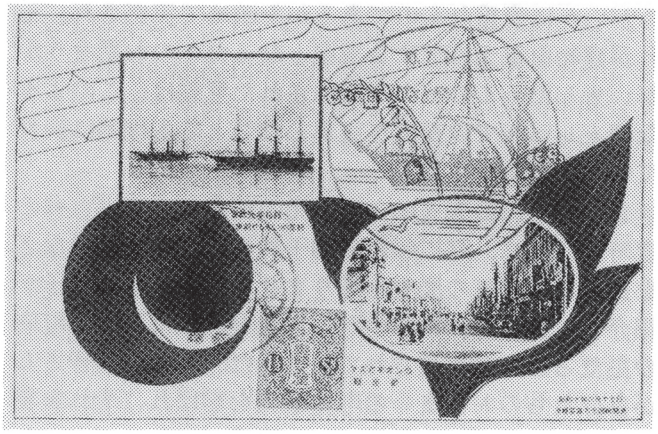


「ペリー日本遠征記」原本に記載されている将棋の図
箱館の番屋に入りこんだベント軍医は将棋を覚えてしまった

しかも「狭義」の開港とは何か。狭く考えて開港といえるなら問題なく立派な？開港ではないか。

「函館区史」が地方史の傑作との評価とは別に、河野の誤用とみられる「狭義」説が明治以来、今日まで、「函館市史」を初めとしてほとんどの書物にのせられているのは残念でならない。

まあどうでもいいことだが、地元がこんないじけた説を取っているせいか知らぬが、たとえば横浜の開港記念館壁面にある大年表には「箱館開港」が全く無視されている。



（第一回　開港記念日「函館港祭り」
昭和10年７月１日　記念絵はがき）

今年の５月16日、函館市中島町での中島三郎助の碑前祭に彼の故郷浦賀から菩提寺の住職など40名程が参加した。三郎助は浦賀の与力時代に「浦賀副奉行」と偽り、ペリー艦隊と初めて交渉した人物であった。「日本遠征随行記」には度々彼の名がでてくる。艦上の招待パーティで首席通訳のウイリアムズは、「三郎助をのぞけば客は皆申し分なく振る舞っていた。しかし三郎助はやむことのない好奇心と厚かましさがあった。大股で歩き回り、ビューカナン船長の帽子をかぶったり鏡に映る自分の姿を眺め、奉行の栄左衛門の後ろでヒョイヒョイ跳ねたり、食卓でわめいたり……こうした彼の奇矯な行動にもかかわらず、彼の才気はなかなかなもの」と言っている。

三郎助は代々の浦賀与力で、海防問題に目を向け砲術に関して諸流派の免許皆伝になり、大砲鋳造から砲台建設まで知識と技術を広げた。ペリー来航で大型軍艦の必要性を確信、上申書を提出している。幕府もこれに答え嘉永６年、三郎助を軍艦造船委員に任命、翌年５月には日本初の洋式帆船、鳳凰丸が竣工、600トンの大船であった。

また三郎助は、幼少よりより和漢の学を学び、和歌、俳句、漢詩に秀で、俳人「木鶏」の号をもっていた。

さらに長崎に設立された海軍伝習所の一回生で勝海舟、榎本武揚らと共に造船、操船を習得し、近代海軍の先覚者、指導者となった。

明治新政府の樹立により榎本らと共に江戸から脱出、箱館五稜郭により翌年５月、千代が岡で二人の息子と戦死、中島町の町名の由来となった。

三郎助の一生の概略は以上のとうりであるが、はるか蝦夷の地に息子を二人も連れ死ぬために来た意味が今日では理解しにくい。故郷に出した手紙で「徳川の恩顧に報いるため箱館を墳墓の地とする」といっているが。

ペリー艦隊の通訳として羅森という中国広東出身の人物がいた。アヘン戦争に続く太平天国の乱を描いた「満清紀事」の著者で、吉田松陰はこの本を抄訳、「清国咸豊乱記」を出している。これは維新の志士たちが愛読したもので影響は大きかった。ペリー艦隊箱館来航で通訳として来箱し、記録に載った初めての中国人であった。松前藩の記録「亜国来使記」には交渉の場面で彼の名前がなんども記載され、箱館の名主、小嶋又次郎の「亜墨利加一条写」には彼の肖像が鮮やかに描かれている。

嘉永７年３月28日午前２時頃、アメリカに密航を企てた吉田松陰と金子重之助が下田に停泊していたペリー艦隊旗艦ポーハタンにやってきた。羅森に逢わせてほしいとウイリアムズに頼んだが拒まれてしまった。松陰は前日に手紙を託していたがあまりにも立派すぎてかえって疑われてしまったのであった。歴史に「もし、たら」は禁句であるがこれがじっげんしていたらと残念な気がする。

羅森は日本遠征の後「日本日記」を表しているがその後の消息は不明であった。昭和56年になって孫の羅延年氏が香港で93才で健在で祖父羅森の事を調べていることがわかった。函館の郷土史研究者の加藤昌市氏が早速手元の資料を提供したが礼状が届いて間もなく亡くなり、遺族に関心がないため資料が四散してしまった。

（郷土史研究家）

第15回全国町並みゼミ吉井ゼミに参加して

佐　藤　善　之

今回のゼミは函館の盛夏を思わせる日差しの中、５月30日から３日間の日程で、福岡県筑後吉井町に全国から約450名の町並み保全の団体関係者、行政の担当者を集めて開催されました。

吉井町は福岡市からＪＲを乗り継いで約２時間、筑後平野の東端に位置しています。天領日田と久留米との中間の宿場町として、また、周辺の地域の農産物の集散地として栄えた町です。往時の繁栄を偲ばせる幕末から明治期にかけての白壁土蔵造りの建物が数多く残っています。緑が豊かでまち中に筑後川からひいた水路が幾筋も走り、独特の町並みを形づくっています。その中でシンポジュウムや町並み見学会、具体的な検討をする分科会や事例報告、研究発表などがとりおこなわれました。

今回のゼミの特色は、町並み保全を環境問題の一環であると位置づけたことです。シンポジュウムのテーマを「環境運動のなかの町並み保存」とし、７人の発言者のうち４人が環境庁の審議官、環境法学や環境経済学の教授など、環境問題の専門家で、町並み保存と環境の接点について討論が進められました。その中で町並み保存は広い意味での、アメニティのレベルでの環境問題であるという位置づけがなされました。

また、国際交流の推進も大きなテーマの一つでした。記念講演として中華人民共和国の張錦秋氏から西安における再開発事業でどのように歴史的な建物に配慮して新たな計画がなされたかについての報告がありました。また、懇親会ではマレーシアの方のスピーチが、最終日には台湾、中国、アメリカからの参加者のそれぞれ40分以上に渡る各国における活動状況の報告がありました。国内の参加団体からの報告、各分科会からの報告は計６報告、各５分間ずつであり、今回のゼミで国際交流に力が注がれていたことがうかがわれます。

吉井町は人口が17,000人の決して大きくはない町です。ゼミの運営には吉井町の住民の方々や行政が総出で取り組まれていました。現地見学会では地元の方々に主な建物の内部までご案内いただきましたが、その際には一部の街路で車の乗り入れを禁止したほどです。吉井町の建物は特に紹介される以外の建物も見事なもので、どの小路を歩いても目をひく建物ばかりでした。

建物ばかりではありません。用水の流れなど、建物の周囲の環境もまた素晴らしいものでした。木々は手入れが行き届き、道はきれいに掃き清められゴミ一つ落ちていません。道行く人も気軽に声をかけてくれます。どれをとってもお住まいの方々の愛着とゼミ出席者へのもてなしの気持ちがうかがわれました。特に私などは今回のゼミで最も遠方の函館からの出席でしたので、北海道からも自分たちの町並みを見に来てくれたと本当に喜んでいただけました。

九州の地は昨年の台風の被害が大きく、歴史的な建物は規模を問わず被害があったようです。吉井町も例外ではありません。そのような中で今回のゼミが開催されたことにより、建物所有者の方が自分たちの町並みがいかに貴重なものであるかを改めて実感され、それが建物を復元修理する契機となったとのお話をうかがいました。このゼミが開催された意義は、このような個人レベルでの交流が実現したことにも端的に表れていると思います。

また、住民の方々による地元の紹介である『吉井の歳時記』では、町に伝わる獅子舞や紙芝居、合唱などを通じて吉井町の歴史を織りまぜながら四季の様子が紹介されました。小学生から70歳を越えた方まで町内の主だった方が出演されていました。吉井町の皆さんが自分たちのお住まいの町の歴史を学ばれ、それを現在にいかして行こうとしている様子が伝わってきました。

吉井町の住民の方々が一体となってこれほどの規模のゼミを成功させた力が、今後の吉井町の町並み保存に生かされることを願ってやみません。

（函館市景観保全課・主事）

吉井の町並み見学

建築と町並み研究会

山　内　一　男

６月６日「函館市西部地区の建築と町並みの再生」をテーマに、第12回日本建築学会建築計画委員会春季学術研究会が金森ホールに於いて開催された。

冒頭、足達富士夫北大教授より函館の建築と町並みの特色と課題の趣旨説明が行われ「町並みの特色を維持した再開発（再生の開発）」へ向けて、パネラーより発言を求めた。パネラーは、越野　武・藤沢重人・岡田新一・村岡武司の４名である。

越野氏は、数度の函館大火が建物と町並みに特色をもたらした歴史を述べるとともに、近代化都市に見られる様式や建物用途の混在を指摘し、西部地区はその縮図であると論じた。

藤沢氏は、景観保全行政が市民運動（歴風会の旧北海道庁移転問題）の影響で、今日の展開に至ったと述べた。そして課題として、建物と町並みを具体的にどう維持していくか、その方法の摸索と西部地区・地域の住環境の改善が必要だとし、検討を進めているとの報告があった。

岡田氏は、市民側からの建物再生が函館には既に存在していた事実を述べ、函館の建物様式をどうとらえ、新しい建物をどの様に町並みに加えていくかが「再生」であると論じ、景観条例後その答えは出ていないと話した。しかし、新しい建物に函館モダニズムの流れが見え隠れしていると、今後の展開に期待する旨を付け加えた。

村岡氏は、西部地区の魅力へのこだわりが市民運動を続ける原点であるとし、旧函館公会堂の復元をきっかけとして、建物外壁の塗装の色彩研究（町並み色彩の歴史）を行ったと述べた。

会場より多数の意見を頂き、最後に足達氏よりイギリスの景観制度の苦慮の報告の中で「景観や建築に対する市民の理解が大切であり、町に対する見方を広げていくことに期待したい。」と述べ、研究会を終了した。

（新日本建築家協会会員
当会　運　営　委　員）

研究会参加者の西部町並み見学

旧谷地頭小学校校舎保存をめぐる総会討議

石井会員：
今年度事業計画書の中に「旧谷地頭小学校校舎保存の保存活用」とあることは、歴風会としてのアピールと理解したい。市当局の現在までの経緯の中で、今ここで歴風会の意志決定が必要であり、それが世論喚起の弾みになると思う。

大河内会員：
会の代表者が「旧谷地頭小学校の保存活用をすすめる会」の一構成員として参加するのではなく、歴風会として独自の行動が必要な時である。それは多くの団体が声を出すことによって行政に民意を反映させる機会を増すことになる、もう一つは従来の運動のヤリ方では、一般会員にまで問題が見えてこない。行政の言うのが正しいのか、他にも問題があるのかを一般会員にもしらせるべきである。

浜島会長：
1．市の対応として昨年10月頃から、保存含みの姿勢から、取り壊しへと変化した。
2．その根拠は３年前の市文化財審議会が「文化財」として価値を認めない、との答申をしている。11年前に調査報告された「日本近代建築総覧」にも記載されていない。更に老朽校舎のため保存活用には新築の場合より多額の費用が必要である。
3．市が根拠とする審議会で文化財とは認めがたいとの答申が出された最大の理由は、文化庁が示す国並みの指定基準に準じて、はかった為で、本来ならば各都市に夫々市独自の文化財の基準があってよい筈だ。又、費用については市の算定とは別に積算は可能である。
4．同問題について既に、
○稲垣栄三
明治大学教授、東大名誉教授、
文化庁保存建造物主査
○藤岡洋保
東京工大建築科助教授
近代建築専攻、全国小・中学校校舎研究社
○越野　武
北大教授、建築史
○遠藤名久
北海道工業大学教授
現代日本の建築学会を代表される４氏が、実際に視察された上で、全員が旧谷地頭小学校校舎の保存とその可能性を強く訴えられている事実を尊重したい。
5．旧谷地頭小学校校舎の問題も含めて、現在の函館市の文化財指定の基準等について、将来に禍根を残さぬよう改めて検討すべき時期である。

（以上は総会当日の討論要旨である。
議事録ではなくメモである。　落合）

事務局だより……

☆５月13日“旧谷地頭小学校校舎の文化財的意義を考える会”が結成された。代表には浜島会長がなりました。(市が４月初め青少年健全育成施設建設のため全面解体の方針を打ち出した旧谷地頭小学校について保存派の新しい市民グループである。

☆５月18日、旧谷地頭小学校校舎の文化財的意義を考える会は、市・市教委・市議会に対し以前「同校舎に文化財的価値はない」と結論した文化財保護審議会に審議を再度開催するよう陳情

☆５月19日、函館市文化団体協議会総会がホテル法華クラブで開催、工藤事務局長が出席。

☆５月23日、平成4年度定期総会(於東邦生命ビル)
平成３年度事業報告・決算報告、平成４年度事業計画案・予算案及びチャリティー益金の使途等について承認決議をいただきました。会員各位から活発な意見が出されました。今後会の運営に取り入れて参りたいと思います。
役員改選にあたり、会長に浜島国四郎、副会長に田尻聡子・落合治彦、幹事に久住盛・岡田祝津子の方々が選出されました。総会に先だち“ペリー遠征記と文化摩擦”と題し、村井雄二郎氏に講演をしていただきました。一般市民の参加もあり、大変有意義な学習会でした。

☆５月27日、市が打ち出した“旧谷地頭小学校全面解体説明会”が市役所会議室で開催されました。説明会に当会会員及び“旧谷地頭小学校校舎の文化的意義を考える会”の会員等が出席しました。

☆５月30日～６月１日、第15回全国町並みゼミ吉井大会が福岡県浮羽郡吉井町で開催されました。当会から田尻副会長、藤田郁運営委員が出席いたしました。

☆６月６日、主催日本建築学会建築計画委員会の第12回建築計画委員会春季学術研究会“函館市西部地区の建築と町並みの再生”シンポジウムが函館ヒストリープラザ・金森ホールで開催されました。当会より会員多数参加しました。

☆米国議会図書館からお礼状
当会発行の10周年記念誌「函館のまちなみ」を、米国議会図書館へ納本のお話しがありましたので会として贈呈いたしました。
これに対し、米国議会図書館交換贈支部アフリカ・アジア交換課長ディヴット・W・ツアイ氏から感謝をこめたお礼状が参りました。

（筆者の方々には、ご多忙のところ原稿をお寄せくださり感謝いたします。　田尻）